

## かつての奨学生を訪ねて

震災から12年、これまでに多くの奨学生たちが社会へと巣立ちました。かつての奨学生たちは、描いた夢に近づいているでしょうか。今回は、震災を乗り越えて水泳に向き合ってきた元奨学生を紹介します。

**菅原笑華さん 宮城県大崎市 特別支援学校教員**

**奨学金受給期間 2011年～2013年**

菅原笑華さんが気仙沼市内で水泳を始めたのは幼稚園のころ。初めは遊びの感覚でしたが、少しずつ頭角を表していきます。けれども、小学6年の卒業式直前に東日本大震災が発生。家も学校も被災、通っていたスイミングクラブも被災したため、地元のプールで泳ぐことはできなくなりました。「選手として結果を残し始めたころで、当時は週に6日、土曜日は2回も練習に通っていました。泳ぐのは楽しいけれど、練習はきつかった。だから、いざ泳げなくなると、また自分を追い込もうという気持ちがなくなっていました。もうきつことはしなくていいんだ、と」

別の町のプールに行き始めたものの、「水泳はしばらくいいかな」と練習は月1回のペースに落ちていきました。「ところがある日、もう少しレベルを上げたいという気持ちが芽生えてきたんです」

練習場を石巻市のクラブに替え、父の送迎で週3回通うように。当時は高速道路が気仙沼までつながっておらず、片道1時間半の道のりでした。それからは少しずつ成績を上げ、高総体で県1位をとるまでになったのです。「試合の遠征費や競泳用の水着代、送迎の交通費など、水泳には結構お金がかかります。父は市場で働いていたので、震災で職を失っていた時期があり、ローンの残っていた自宅の再建も大変でした。奨学金があったから水泳を続けてこられたと思っています」



「奨学生の皆さんには、好きなことだけは諦めず、全力で取り組んでほしいです」

以来、水泳は笑華さんのライフワークとなり、社会人となっても今も国体出場を目指して練習を続けています。

### 「笑華先生なら」と思ってもらえるように

水泳を続けながらスポーツに関わる仕事がしたいと、保健体育の教員免許をとった笑華さん。特別支援学校の教員となって3年目となりました。今年、担当しているのは中学1年生。とても元気がよく、いい意味でエネルギーを吸い取られているとか。一方、排泄がうまくいかない、給食の好き嫌いが激しいなど、課題のある生徒もいます。

「支援学校の生徒は、何でもすぐにはできないし、できそうできないことが続きます。でも、生徒との距離を少しずつ縮めながら、時間をかけて『やっとできた』というときは嬉しい。粘り強く、忍耐強く、というのは水泳と重なる部分があるのかもしれない」

そして、自信を持ってない生徒には、学校生活の中で「自分にはこれができる。自分の長所はこれだ」というものを一つでも見つけて、卒業後は胸を張って生きてほしい。だから、よかったときは全力でほめ、生徒のいいところを見つけれられる先生になりたいといいます。「えみか先生なら話ができる」と安心して生徒たちに思ってもらえるように。それがいまの目標です。



一度は諦めかけた水泳  
これからもずっと続けたい



「水泳はおばあちゃんになってもやりたい。陸にいるより水にいる方が楽なので(笑)」

得意種目はクロール。迫力ある泳ぎを見せる大学時代の笑華さん

## 被災地のいま

三陸海岸のほぼ中央に位置する岩手県下閉伊郡山田町。東日本大震災の大津波や、その後の大規模火災により壊滅的な被害を受けました。それから12年が経ち、さまざまな分野で復興が進み、現在は町の「再生」から「発展」へと歩み続けています。過去の教訓が途切れないよう、先人の思いを未来につなぐ活動を行う一方、観光政策に積極的に取り組み、地域経済の活性化へとつなげる町のいまを、写真とともにご紹介します。

### 山田町の誇り、三陸の海とオランダ島



オランダ船「ブレスケンス号」が漂着したことから名づけられたオランダ島(写真中央)は、東北唯一の無人島の海水浴場があることで知られる。2020年には、震災以来10年ぶりの海開きが再開され、以降、観光復興の目玉のひとつとなってきた。島周辺には海いっぱい養殖いかだや漁網が並び、豊かな山田湾を象徴する風景となっている。山田町でもっとも重要な産業のひとつが漁業。その様子を見学・体験できるツアーをはじめとする体験型のプログラムが企画され、山田観光の魅力伝えていく。

提供：山田町

### 津波被害の教訓、大海嘯記念碑



山田町を襲った過去の津波被害の教訓を伝え続けるための記念碑。山田町には津波碑が計14基あり、左の2基は1933年(昭和8)昭和津波の翌年に建立された。「大地震の後には津波が来る」「津波に追われたら何処(どこ)でも此処(ここ)位高い所へ」など命を守るための先人の5つの教えが刻まれており、今日も山田町を見守っている。



### 山田町津波碑ガイドマップ

山田町と岩手県立山田高等学校が協働で行う「津波震災伝承事業」のひとつ。実際の津波碑を確認し、碑文を解説するなどの活動を通じて学びを深めた。2019年度の高校1年生が3年間、過去の津波について学ぶ中で周知する必要性を提案し、思いを受け継いだ1年生が2023年2月にガイドマップを完成させた。今後はさまざまな震災伝承活動に活用される予定。(p6に関連記事)



提供：山田町

### 山田町のいま

津波による悲劇だけでなく、津波火災にも見舞われた山田町には被災の大きな爪痕が残った。しかし、この12年で復興が進み、新しい建物が増え、町は再生している。背後に見える豊かな山々と美しい山田湾とともに歩んできた町の本来の姿を取り戻し、そこからさらに発展しつつある。

提供：山田町  
2020年9月撮影

